

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：35412

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K13184

研究課題名(和文) 日本における教員のメンタルヘルスの維持・改善に寄与する研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a training program to contribute to the maintenance and improvement of teachers' mental health in Japan

研究代表者

前田 一篤 (Maeda, Kazuma)

広島文化学園大学・人間健康学部・講師

研究者番号：20733231

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教員のメンタルヘルスの切り口として、人が精神的不安定をもたらす要因(以下、リスクと記載)を克服する過程で発揮される能力である「レジリエンス」に着目し、その向上を図る研修プログラムについて開発・検証することを目的とする。研究対象としては、その職務に特徴を持つ(松田, 2010; 岩田, 2013)と報告されている、保健体育科担当教員を中心に検証していくこととする。本研究では、保健体育教員のレジリエンスの特徴及び、自己理解および相互理解に主眼を置いた活動がレジリエンスの向上に寄与する可能性が示唆された。今後、大規模調査による本研究結果の妥当性・信頼性の確認が早急に必要となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果から、教員の資質能力の向上を多角的に支援するため、メンタルヘルスの維持・改善に寄与する取り組みを検討する基礎資料となり得る。昨今の教員を取り巻く社会状況として、多忙であることが課題の一つであるとの指摘が散見されるが、実践的指導力の向上とメンタルヘルスの維持・改善を同時に実現するプログラムの検討の一助となり得る。コロナ禍においてはプログラムに制約が生じるが、どのような状況下でも効果が期待できるフレームワークの検討は重要となるであろう。今後は、大規模調査により妥当性・信頼性の担保を図っていくことが求められる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on "resilience," which is the ability to overcome the factors that cause mental instability (hereinafter referred to as "risk"), as an approach to the mental health of teachers, and aims to develop and verify a training program to improve it. This study focuses on health and physical education teachers, whose duties are reported to be unique (Matsuda, 2010; Iwata, 2013). The present study suggests that the characteristics of resilience of health and physical education teachers and activities focusing on self-understanding and mutual understanding may contribute to the improvement of resilience. In the future, it is urgently necessary to confirm the validity and reliability of the results of this study through a large-scale survey.

研究分野：教師教育

キーワード：教師教育 レジリエンス メンタルヘルス ホールシステムアプローチ

## 1. 研究開始当初の背景

昨今の学校現場を取り巻く諸問題の1つとして、教員のメンタルヘルスの悪化が叫ばれている。この問題に関して、教職員の文部科学省(2013)は、精神疾患による教員の休・退職者数は高水準で深刻な状況であり、教員のメンタルヘルス対策の充実・推進を図ることが喫緊の課題であると指摘した。近年はその改善に向けた取り組みが各方面で実施されつつあるが、休職に至らずともリスクを抱えつつ職務についている教員の存在を考慮すると、教員のメンタルヘルスは依然として危機的状況にあると考えられる。

教員のメンタルヘルスに関連して、これまでは、教員におけるストレスやバーンアウトについての研究(例えば、新井,1999;齋藤)や、教員の職務遂行上における悩み事についての研究も見られるようになってきた(例えば、岩田,2012;高島,2013)。さらには、人のメンタルヘルスの維持に有効なものとして、レジリエンス(Grotberg,1999)という概念が注目され、教員のレジリエンスについても、紺野ら(2006)や木原(2007)によってその因子についての検討がなされている。レジリエンスとは、ストレスや悩みの克服に寄与する人間の能力であり、その人が置かれる環境や経験によって変化するものである。また、強化することが可能な能力であるとされている(長内,2004)。これらの先行研究から、教員はどの年代においてもストレスや悩み事を有していることが明らかになった。また、教職経験年数や担当教科によってそれらは変化することが示唆された。しかし、先行研究からは教員が抱えるリスクの内実と結末については読み取ることができるが、その過程において具体的にどのような要因が影響を及ぼしているかは言及されていない。また、教員のレジリエンスについては、校種や担当教科の違いについては言及されていない。

他方、課題解決や組織・人材の開発に寄与し、あらゆる個人や集団の自己組織化能力を發揮させる有効な方法として「ホールシステムアプローチ」がある。その代表的な手法としては、「ワールドカフェ」、「OST(オープンスペース・テクノロジー)」、「AI(アプリシエイティブ・インクワイアリー)」などがある。これらの手法に共通して、組織の縦や横の関係性を越えて対話することで、課題解決のみならず、様々なステークホルダーが相互に関わり合うことによって、関係性の構築や知識の伝達が可能であるとされている。

本研究においてはこの概念を基にして、全体的な課題や方向性、およびそれに関わる集合知を創出していく組織開発が可能な手法である「ワールドカフェ」、ある集団における関係性の形成や、効率的かつ継続的な集団づくりに主眼が置かれている手法である「チームビルディング」、より個々への効果が期待され、参加者の自己肯定感や協調性の伸長を見据えた手法である「自然体験活動」の、3つの形式からプログラムを考案し、その効果について検証する。これらの視点からその効果を検証することで、それぞれの特性から集団・個人双方への多角的なアプローチが可能であり、「環境要因」と「個人要因」で構成される教員のレジリエンスに対してもどのような影響があるかを実証することが可能となる。このことから、教員のメンタルヘルスの維持・改善に寄与する研修プログラムの開発に極めて有用であるに違いない。

## 2. 研究の目的

以上の背景から、本研究は、日本における教員のメンタルヘルスの維持・改善に寄与する研修プログラムを開発・検証することを目的とする。その切り口として、教員のレジリエンスを向上させる「ホールシステムアプローチ」を取り入れたプログラムを考案し、その効果について検証する。とりわけ、本研究においては、申請者の過去の研究で得られたように、レジリエンスが比較的高く、その構成に特徴を持つ保健体育科担当教員を中心的な調査・比較対象とする。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は下記の通りである。

- 1) 中等教育段階における教員のレジリエンス尺度を、質問紙調査を用いて再検討する。収集したデータは、SPSS Statistics Version24を用いて統計処理を行う。
- 2) 教員のレジリエンスを高める研修プログラムとして「ホールシステムアプローチ」を基にした3つの手法(「ワールドカフェ」、「チームビルディング」、「自然体験活動」)から検討する。収集したデータは、SPSS Statistics Version24を用いて統計処理を行う。
- 3) の参加者を対象に、参加したプログラムの中で生じた出来事の詳細に加えて、職務遂行上のリスクとその克服する過程を調査し、教員のレジリエンスの形成・変容に寄与する要素について事例的に検証する。分析方法として、収集したデータからトランスクリプトを作成し、NVivo11を用いてコーディングを行う。

## 4. 研究成果

本研究の結果、以下の成果が得られた。

- 1) 中等教育段階における教員のレジリエンスは、7つの因子からなる計23項目からなる尺度の内的一貫性が確認された。また、先行研究と比較して下位尺度の解釈や妥当性・信

頼性の高いものであることがうかがえた。

2) 教員のレジリエンスを高める視点として、「主体性・省察・関係性」が重要となることが示唆された。そこから、「チームビルディング活動」及び「自然体験活動」の有効性が示唆された。

本研究の成果から、教員の資質能力の向上を多角的に支援するため、メンタルヘルスの維持・改善に寄与する取り組みを検討する基礎資料となり得る。昨今の教員を取り巻く社会状況として、多忙であることが課題の一つであるとの指摘が散見されるが、実践的指導力の向上とメンタルヘルスの維持・改善を同時に実現するプログラムの検討の一助となり得る。

コロナ渦においてはプログラムに制約が生じるが、どのような状況下でも効果が期待できるフレームワークの検討は重要となるであろう。今後は、大規模調査により妥当性・信頼性の担保を図っていくことが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 前田一篤・白石智也	4. 巻 3
2. 論文標題 小学校教員におけるレジリエンス因子に関する基礎的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島文化学園大学人間健康学部紀要人間健康学研究	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田一篤	4. 巻 68
2. 論文標題 日本の体育教師教育研究における研究方法に関する一考察 - 研究アプローチとリサーチエスションの関係性を手掛かりに -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部（文化教育開発関連領域）	6. 最初と最後の頁 253-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前田一篤・東川安雄	4. 巻 2
2. 論文標題 スポーツ指導実技A（器械体操）受講学生の学習経験に関する調査研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間健康学研究	6. 最初と最後の頁 71-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 東川安雄・房野真也・河野喬・森木吾郎・前田一篤	4. 巻 1
2. 論文標題 部活動が高校生のライフスキル獲得に及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島文化学園大学人間健康学部紀要人間健康学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 前田一篇
2. 発表標題 小学校教員におけるレジリエンスについて
3. 学会等名 徳山大学地域貢献研究中間発表会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------